

お三夜様

匠 瑳 探 訪

199

新型コロナウイルス感染症が流行し、3年目の今年は、感染対策を講じて催し物や地域行事が再開されたところも多く見られました。市内の集落ごとに行われてきた伝統行事もコロナ禍の中、対応に思い悩むところもあったことでしょう。

江川区(吉田地区)の「お三夜様」の当番に当たる人から、その由来を知りたいと連絡がありました。同区は三つの集落に分かれ、コロナ感染症が広がる以前は、毎年1月・5月・9月・11月の4回、「お三夜様」の23日に近い休日に「二十三夜

講」が行われていたそうです。

二十三夜講は、千葉県内で全県的に分布するとされ、講に参加する人たちも、地域によって男性や女性、そして年齢もさまざまとされます。1月・5月・9月の23日の夜、「講中」といわれる仲間が集まり、掛け軸をつるしてお経を唱えたり飲食や歓談をしたりしながら月のお出の深夜まで待ち、豊作や家内安全などを祈願したといえます。

月を拝んで祈願や悪霊を払う「月待行事」は他に、十五夜、十九夜などの特定の月例の夜にも行われました。

それらを知る手掛かりは、寺社の境内や墓地、路傍などに立つ「供養塔」にあります。

二十三夜は「勢至菩薩」を本尊とすることから、石塔正面に「大勢至菩薩」「奉待三夜勢至菩薩」「二十三夜塔」と刻まれたものが、旧八日市場市域では10余基確認されています。1756年がもっとも古く、1800年代前半の造立がほとんどです。

江川下集落では「勢至菩薩」が描かれた掛け軸を当番が引き継いで行われてきました。11月下旬の再開を予定していたものの、コロナ感染状況により取りやめになったと聞きました。

集落ごとの伝統行事を再開し、継続するためには、その由来や先人の残したものを講員に知ってもらうことの大切さを再認識する機会にもなりました。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問 秘書課 広報広聴班

☎ 73・0080



二十三夜講の掛け軸